2014年1月5日　　　　　新年礼拝説教要旨

**「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい。」**

**ルカによる福音書第20章19－26節**

今年の元旦礼拝で開きました言葉を、礼拝堂の正面の左右に掲げました。

右の「みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。」という詩篇119篇130節の言葉は、今年だけでなく、わたしたちが聖書の御言葉を読むとき聴くとき繰り返し味わうときに、この通りに神の言葉が光を与え、わたしたちに働きかけてくださる約束です。信じ期待して進みましょう。また左の「神がすべてのことを働かせて益としてくださることを私たちは知っています。」というローマ書8章28節の言葉は、わたしたちが考える益ではなく、神がお考え下さる最善の益にわたしたちを導いてくださるとの約束です。この年に、山があり谷があり、損と思えることが続き、どうしてと思うことが続いたとしても、神の最善は実現すると信じて行きましょう。

今年は3月までルカによる福音書の20章から24章までの御言葉を聴いていきます。わたしたちの目が開けて、主イエスのことが深く分かり、礼拝のたびごとに、お互の心が内に燃やされる恵みをいただきと願っています。

25節の「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい。」という言葉は、英語の辞書には有名なことわざとして、聖書の箇所まで付けて載せられています。ローマの皇帝カエサル、英語ではシーザー。この名前は紀元前100何から44年まで生きた人の個人名でしたが、やがて皇帝(帝王)の意味になります。

ここで始まった修羅場のような駆け引きは、9節からの「ぶどう園と農夫」のたとえ話がきっかけとなっています。悪い農夫たちは借りていたぶどう園の主人が送った3人の僕を辱め、最後には農園主のひとり息子まで殺してしまいます。ぶどう園を自分たちのものにしようとしたのです。神が遣わされた者を殺そうとしている自分たちに当てつけて、主イエスが語られた話だと分かり、律法学者たちや祭司長たちは、主イエスを殺そうとします。でも自分たちでは難しいので、ローマ皇帝への税金問題の質問をして、言葉じりを捕らえて、総督に引き渡して死刑にしようと企んだのです。主イエスはこのような罠から逃げるのではなく、むしろ的確に答えつつ、さらに非常に大切な教えを語られる機会としてしまいました。「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい。」と命じられた言葉に、この地上に生きる信仰生活の基本があります

１デナリ銀貨は大きさは１円玉ですが、銀貨であり、当時の1日分の労賃の額でした。紀元前200年ころから鋳造されたもので、作られた時の皇帝の肖像が刻まれています。律法学者たちや祭司長たちは、ローマ帝国の支配には反抗していますが、経済はローマの貨幣で動いている社会でしたから、矛盾していますが彼らも銀貨を持っていました。「デナリ銀貨を見せない」と主イエスは言われ、その貨幣の肖像を彼らに確認させ、「カイザルのものはカイザルに」と言われました。その社会に生きている以上、社会人として納税の義務を果すように教えます。主イエスを信じる人も、まだ信じない人も、この国に生きる以上は平等に納税の義務を負うのです。特別扱いはありません。しかし、ローマの皇帝も神のもとにあり、神の許しの中で立てられている国です。世界中のすべての国々は神のもとにあります。ですから、税金の問題を越えて、「神のものは神に返しなさい。」と、主イエス・キリストは神の下に生きる姿を宣言されたのです。

人間の罪とは、一言で言えば、私物化です。神のものを神に返そうとしないで、自分のものだと主張し、全てを自分勝手に用いていくのです。そこに権力が生まれ、政治を動かすものが自由に国民の命を利用するようになります。それが戦争です。命は神が与えて下さったものです。どんなに科学が発達しても、人間には地上の物質を使って命を造ることはできません。しかし人間は命を操作することができると思い込み、命の大切さを踏みにじっていきます。気をつけなければならないのは、自分と違う信仰の人々を、神々の名で殺す罪を、わたしたち人間は犯してきたし、いまも犯し続けていることです。

神のものを神に返そうとしない。自分が神になってしまう。自分が神として仕えられようと願う。そして人を自分に仕えさせる。これは主イエス・キリストとは全く反対です。

元旦礼拝でもこの話に触れましたが、引用が不正確でしたので、再度お話します。

昨年末に関西の、大阪、岡山、龍野、三田の4つの教会を訪ねました。途中、小豆島に行き、壺井　栄の小説「二十四の瞳」の分教場を訪ねてきました。瀬戸内海の静かな海の岬にあり、映画のロケの場所も残されていて、そこで高峰秀子主演、木下恵介監督の映画を見てきました。主人公の大石先生の息子の大吉が、自分は早く中学生になって、航空兵として志願したいと母に言います。母親の大石先生はこう息子に言うのです。

「なあ大吉、おかあさんはやっぱり大吉をただの人間になってもらいたいと思うな。名誉の戦死なんで、一軒にひとりでたくさんじゃないか。死んだら、もとも子もありゃしないもん。おかあさんが一生懸命に育ててきたのに、大吉あそない戦死したいの。おかあさんが毎日泣きの涙で暮らしてもえいの？」のぼせた顔に濡れ手ぬぐいをあててでもやるかのように言ったが、熱の激しさは濡れ手ぬぐいでは効き目がなかった。かえって大吉は母親を諭しでもするように、「そしたらおかあさん、靖国の母になれんじゃないか。」これこそ君に忠であり親には孝だと信じているのだ。それでは話にならなかった。「あーあ、このうえまだ靖国の母にしたいの。このおかあさんを。『靖国』は妻だけでたくさんではないか。」

神ではないものを神として信じ込ませ、そのために命まで無理やり戦場に引き出し、死ぬことを求める。日本は70年前には、瀬戸内海の小さな島の隅々まで、そうであった。でもそこに住む一人の母親が、夫が戦死し靖国の妻とさせられた上に大切な息子を失って靖国の母にされてたまるか、と訴えている。

「神のものは神に返しなさい。」と、主イエスが、あなたに求めておられます。私物化しているものがあるなら、悔い改めて、神にお返ししたい。この身も魂も。

ディボーションノート　１　2014年1月1日―11日

|  |
| --- |
| １月１日(水曜)　 詩篇７７篇  「わたしは神にむかい声をあげて叫ぶ。わたしが神にむかって声をあげれば、神はわたしに聞かれる。」信仰は神を呼ぶことです。神から与えら得る慰めを求め、それ以外の一時的な慰めを拒む。キリストを信じる者は、歎きと悲しみを深め、魂が衰え、まぶたが閉じない不眠の苦しみ、物言うことのできない沈黙を体験する。渦巻くような混乱の中で、神はわたしたちを捨てられるであろうか。いや、決して見捨てられることはない、との思うが芽生え、神が今までなさった御業を思い出してゆく。まず神の恵みを数えることから始めよう。 |
| １月２日(木曜) 　詩篇７８篇  　聖書はイスラエルという小さな民族を導かれた神の歴史を語る。聖書は旧約の律法と文学と預言、それに対する新約の福音と手紙と黙示と、対比できる。そして旧約のヨシュア記から始まるイスラエルの歴史と、新約の使徒行伝が語る教会の歴史とが対比される。神は生きて働きかけるお方である。2014年を神はどう導いてくださるのだろうか。「彼らをして神に望みをおき、神のみわざを忘れず、その戒めを守らせるため」(７節)にも、歴史をしっかりとたどり、神に背いた歴史の結末と、神に従いつつ厳しい歴史を生き抜いた結末との違いをこころに刻みたい。人を通して歴史を動かされる神の働きに信頼して進もう。 |
| １月３日(金曜)　 詩篇７９篇  　時代はバビロン捕囚(紀元前587年)のころだろうか。民族の力の強さは彼らが信じている神の力の強さによると考えられていた。支配するバビロンの民は、お前たちの神はどこにいる、と豪語する。このような侵略と敗北を招いたのは、本当の神を捨てて偶像礼拝に堕ちて行ったからであると分かった。そこで初めて、「われらの救の神よ、み名の栄光のためにわれらを助け、み名のためにわれらを救い、われらの罪をおゆるしください。」と悔い改める。神の栄光を汚した罪を悔い改め、再び神の栄光が回復されるようにと祈る。まず信仰に立とう。神を賛美し、栄光をほめたたえ、神の語りかけを聴く礼拝生活を立て直そう。 |
| １月４日(土曜)　 詩篇８０篇  　「神よ、われらをもとに返し、み顔の光を照してください。そうすればわれらは救を得るでしょう。」３・7・19節に3回繰り返されている。リフレーン(繰り返し)は、詩篇の合唱部分か、二つの歌いあう掛け合いのパートだと思われる。そしてこの詩篇の主題を示している。今は滅ばされ、暗黒の中を歩んでいる民の叫び。2節は北王国がアッシリヤに滅ぼされた様子かも知れない。涙のパンを彼らに食わせ、多くの涙を彼らに飲ませられた神よ、どうかみ顔の光を我らに。 |
| １月６日(月曜)　 詩篇８１篇  神がわたしたちに求められることは一つです。「わが民よ、聞け、わたしはあなたに勧告する。イスラエルよ、あなたがわたしに聞き従うことを望む。」天地を創造され、今も摂理の御手で導かれる神は唯一の神です。ですから、わたしたちの中に他の神々があってはならないし、神ではない神々を拝んではならないのです。キリスト教は外国の宗教と考えている方が多くいます。確かに欧米から伝わってきました。でも聖書の信仰は地域で言えばアジアの西の果てで生まれました。そしてどこから始まろうと、神はおひとりです。人間が作り出し、増やしたり減らしたりできる偶像としての神は、礼拝すべき神ではありません。 |
| １月７日(火曜) 　詩篇８２篇  　「神は神の会議のなかに立たれる。神は神々の中で、さばきを行われる。」これを言葉の通りに読めば、唯一の神が、偶像の神々の中に立たれて、神々を裁かれる様子に見えます。ここでの神々とは、王とか裁判官という責任ある人々を指していると読めます。正しいさばきが行われず、社会を動揺させている中で、神は、そのような社会を招いた指導者を罰すると宣言されます。主イエス・キリストはヨハネ10章34節でこの言葉が引用されます。神の言葉を託された人々を神々と言っているなら、父なる神が聖別して世に遣わされた者が、「わたしは神の子である」と言ったからとて、どうして神を汚す者だと言うのか。本当に主イエス・キリストの旧約聖書の引用の的確さと自由さに驚かされます。 |
| １月８日(水曜)　 詩篇８３篇  「神よ、沈黙を守らないでください。神よ、何も言わずに、黙っていないでください。」神の語りかけが聞こえてこない苦しみがあります。周囲の敵の声だけが大きく、連合して敵対してくる敵が立派に見えます。「彼らは言いました、『われらは神の牧場を獲て、われらの所有にしよう』と。」　神の声が聞こえないのではなく、わたしたちの目も耳も口も神に向けられていなかったからではないか。神は祈りをすべての祈りを聴いていて下さる方ですから、静かに切実に、この詩人は再び祈り始めます。全地を治める(しろしめす)に信頼して。 |
| １月９日(木曜) 　詩篇８４篇  　「わが魂は絶えいるばかりに主の大庭を慕い、わが心とわが身は生ける神にむかって喜び歌います。」この詩人は神が御臨在される場所である神殿を、心から慕っています。わが魂の「魂」とは言語で「ネフェシュ」と言い、「息」をさします。人は神から吹き込まれた「神の息」によって生かされます。信仰が与えられて、神の子とされ、神が共におられる教会の礼拝、日々の生活、起きているときも寝ているときも、信仰に生きられる日々こそ、わたしたちの何物にも換えられない宝の日々です。「あなたの大庭にいる一日は、よそにいる千日にもまさるのです。わたしは悪の天幕にいるよりは、むしろ、わが神の家の門守となることを願います。」神を礼拝し、神に仕えることのできる恵みを喜ぼう。 |
| １月１０日(金曜)　 詩篇８５篇  神は再び民をかえりみてくださり、捕囚から解放され、民の不義を赦して下さいました。これが起こった事実なのか、まだ起こらないがやがて起きることなのか、詩篇の内容は一定していません。2節は過去の回顧であり、5節は将来についての願いである、と読めます。帰国しても厳しい生活を送らなければならなかった人々にとって、神が遣わしてくださる救い主メシアによって到来する新しい国を待ち望むことが希望でした。そこでは「いつくしみと、まこととは共に会い、義と平和とは互に口づけし、まことは地からはえ、義は天から見おろす」ことが実現します。救い主イエス・キリストにあって、大いなることを期待し、企てましょう。 |
| １月１１日(土曜)　 詩篇８６篇  　「あなたはわたしの神です。」「私はひねもす(一日中)あなたに呼ばわります。」「主よ、わが魂はあなたを仰ぎ望みます。」ここには熱心で必死で懸命な祈りがあります。こう祈る思いを起こしてくださるのは、「アバ、父よ」と神を呼ばせて下さる聖霊です。聖霊なる神は、神の言葉と神に信頼する心とを与えてくださり、祈りに導いて下さいます。祈祷会で聖書を学び、その上で集中して祈ることには意味があります。主イエスが教えて下さった「主の祈り」にこそ、祈る順序と内容と集中した短さとが示されています。 |